國學院大學学術情報リポジトリ

戦後國學院大學における学生の研究活動：史学専攻学生の課外活動を中心として

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-07-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 齊藤, みのり
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000707

戦後國學院大學における学生の研究活動

――史学専攻学生の課外活動を中心として――

齊藤　みのり

はじめに

國學院大學では、戦前・戦後を通して、授業以外でも学生教育が行われていた。戦前の学会はその代表で、国史学会・国文学会・漢文学会・道義学会では研究会・報告会などが盛んに催された[1]。中でも戦前の国史学会は、本学で史学を学ぶ学生向けの研究会や古典籍や古文書の講習会、或いは見学旅行などを催し、授業を補完する形で学生への教育・指導の役割を担い、この役割が戦後、学友会の学術部会である史学会に受け継がれることになった[2]。

これらの学生教育や講習会などの活動は、戦後も継続されており、特に史学会などは現在でも活動を続けている組織である。戦後、学生の活動は学会から学友会の学術部会などに移行していくが、これらの学生主体の活動を追うことも、本学の学生教育や研究活動について明らかにする上で必須である。とはいえ、これらの活動団体は多く、追い切れていないのが実情である。

そこで本稿では、戦後の史学専攻の学生に関わる教育、あるいは研究活動に焦点を絞って分析を行う。第一に上げら

れるのが、以前拙稿でも言及した前述の史学会であるが、同会の活動の変化を追うことも、当時の学生の授業外学習・研究発表の場としての役割を確認する上で重要である。また、戦後の授業外において、勉強や研究活動を行うことができる場というのは、史学会以外にも存在している。指導という点では、戦前より大学新聞などで確認できる史学研究室での研究会などが挙げられるだろう。加えて、戦後は大学院も設立されており、昭和二十六年（一九五一）に文学研究科が誕生している。大学院でも、後に史学専攻では大学院生による大学院会が発足しており、当時の大学院生の活発な活動が行われていたことが確認できる。

これらの特徴を鑑みて、本稿の分析対象としては、大学生を対象とした史学研究室、戦前の国史学会から分裂した史学会の他、戦後設立された史学専攻大学院会を対象とする。学生の研究活動やそれに対する教育について深く知るためには、これらの場や組織における活動を追っていく必要があるだろう。

なお、分析に当たり、戦後から現在までの期間全てを分析するのも紙数や史料の関係上難しいため、本稿では昭和四十年代までを区切りとしたい。この理由として、同時代は教学制度の改正が盛んで、昭和四十七年度からカリキュラムの改正の他[3]、一般教養課程に総合科目の開設が行われた[4]。加えて、戦前より本学にて教鞭を執り続けていた石田幹之助教授が四十九年に死去[5]するなど世代交代がはじまっている。更に、学生運動も未だ盛んな時期であり、暴力事件も起きていたほか[6]、互助会の解散[7]や若木祭の分裂[8]、学生会費問題[9]など学内学生組織にも問題が頻発していた時期である。これらの事件の前後で、その影響を受けて学生の活動形態が変わっていったことは想像に難くない。そのため、この昭和四十年代を体制変化の画期として分析の区切りとする。

一　授業外の研究室指導

はじめにでも示した通り、国史学会で学生向けの研究会・勉強会が行われていたことは先行研究で明らかとしたが、そもそも國學院大學の史学専攻分野では、大学の授業外で、研究室における古文書読解や研究の指導を研究会などと称し、戦前より行っていた。ここでは、国史学会との関係や、戦後の研究室指導と対比をするため、戦前の研究室指導についても触れておく。

昭和六年六月の大学新聞には、次のように記されている。

〈史料一〉昭和六年六月　史研最近のメモ[10]

国史研究室は従来と同じく研究室自体に直属するものとして次の如き研究会を持つてゐる。

第一分科研究会（植木主任指導）にて毎週月曜零時半より「吾妻鏡」を輪読す。

第二分科研究会（松井主任指導）にては毎週土曜零時半よりマイヤアの「歴史の理論及び方法」を輪読す。

尚相互研究会（祝助手司会）にては毎週木曜午前十時より研究発表、新刊発表、旅行報告等を行ふ、本学期すでに行はれたもの次の如くである。

土佐見聞史談

主任　植木直一郎

（紹介）マルクス主義と□□（判読不可）

助手　祝　宮　静

江戸経済史に就て
研究生　牛塚　六郎
平安朝史に関する史籍解題
研究生　小森　嘉一
天壌無窮の神勅に就て
三回生　浅野　長夫

最後に吾妻鏡講読会は主として一回生のため特に毎週火曜午前十時より開く。

（後略）

当時の国史研究室は第一と第二に分かれており、第一研究室は国史で植木直一郎教授、第二研究室は東洋史で松井等教授がそれぞれ主任であった[11]。本史料からは、両主任教授が定例の勉強会を開いている他、合同の研究発表会も行われていたことがわかる。植木教授の吾妻鏡輪読会については、本来の月曜日以外にも、入学してきたばかりの一回生のために火曜日にも講読会を行っていたことが確認できる。

この指導教授主導、研究室単位の研究会はその後も続き、例えば昭和七年十月の大学新聞には、国史研究室で植木直一郎教授が特別講座「国学発達史」を毎週月曜日に開催していることが記される他[12]、昭和九年八月の大学新聞には、月曜日に高柳教授指導研究会、火曜日に松永教授指導独逸語原書講読、木曜日に長倉助手指導研究会、金曜日に長倉助手指導吾妻鏡講読、土曜日に第一分科植木教授指導研究会が記される[13]。この月曜日の高柳教授の指導研究会については、同年の『国史学』にある、昭和七年より継続してきた「大乗院寺社雑事記」の輪読会と曜日や指導者が重なって

いるため[14]、国史学会主催のものと推測されるが、それ以外は植木教授・松永教授ら個人によるものと考えられよう。

研究室指導は、昭和十年を最後に、大学新聞から確認できなくなる[15]。一方、入れ替わるように国史学会では、史籍講習会が昭和七年より開始され[16]、更に昭和十年頃よりこれに加えて、本学所蔵の久我家文書を用いた古文書を教材とした古文書講習会も始まっている[17]。研究室指導は国史学会より前に始まったが、やがてその機能が国史学会に移譲されていったのだろう。

他方、戦後になって国史学会の一部機能が学友会所属の部会である史学会が担うようになった後に、研究室における活動が確認できる。昭和二十三年十一月の大学新聞には、史学第一研究室は、岩橋小弥太教授主導で昨秋より円覚寺什物曝涼の際史料採訪、東京大学史料編纂所所蔵円覚寺文書影写本書写が完成したこと、また毎週水曜日の古文書研究会にて久我家文書・鶴岡八幡宮古文書の解説を行っていること、その他雅楽の実演や国立博物館の展覧会を見学したことが記されている。一方、史学第二研究室では外国史関係の研究会が開催されており、石田幹之助教授指導の「史記貨殖列伝講読会」、倉橋文雄指導「西洋近世史研究」の研究会が催されている[18]。この内、第一研究室の古文書研究会については、当時の史学会の活動が確認できないため確定はできないが、久我家文書を使用している点からも、国史学会の系譜をひく史学会内の活動の可能性が高い。その他の見学・採訪も、後に『国史学』に掲載された史学会活動と重なる部分があるため[19]、研究室単位なのか、あるいは史学会の活動なのか判別しづらいというのが実情である。一方、外国史については、発足当初の史学会活動には確認できないため[20]、研究室単位での活動であった可能性が高い。とはいえ、昭和二十八年七月の『国史学』掲載の史学会動向に、外国史部会に関する記述があるため[21]、後に史学会に吸収されたのだろう。

これら、戦後に研究室にて行われてきた学生向けの指導会・研究会は、結局昭和二十年代の内に完全に史学会に吸収されたようである。昭和二十八年二月の大学新聞には、研究室にて「日本霊異記」や「中世古文書」などが史学会

主催の研究会として行われていた一方、学生有志による「歴史における民族の問題」〈月曜〉・「中世的世界の形成」〈木曜〉・井上清著『明治維新』〈金曜〉なども行われていたことが記されるが、同年十一月の大学学報に掲載されている「研究会だより」の史学研究室の活動内容では、同年の『国史学』彙報欄掲載の史学会の研究会と合致するようになっている。[22] この時点で、授業外の学生向け研究会・勉強会は最終的に史学会に統合されたと見て間違いないだろう。

二　史学会の創設と活動

先述のように、かつて研究室において行われていた勉強会・研究会が、戦後に入り、史学会に統一されたことが明らかになった。この史学会であるが、戦後学友会の再建に伴い、昭和二十一年度から学友会の学術部会の一つとして新たに発足した部会であり、拙稿で紹介した通り、戦前の国史学会が担っていた教育活動が史学会へ移行したことで成立した組織である。発足当初の史学会活動についても、拙稿で既に言及しているが、戦後史学会の活動を確認するにあたり、ここで今一度振り返っておきたい。なお、この発足期の史学会の詳細情報については、拙稿「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」にて触れているので、そちらを参照いただきたい。[23]

そもそも史学会は、國學院大學在学生を会員とし、教授を会長・顧問などに推して運営される学生主体の会である。独立当時の史学会の活動は『国史学』に掲載されており、昭和二十四年度には、例会、定例研究会、研究討論会、見学調査、公開講演会・批判会が行われている。例会では、古代から近世にかけて幅広い分野に掛かる報告が行われた他、卒業論文の発表の場でもあった。[24] 一方定例研究会は、岩橋小弥太教授「続日本紀輪読会」、村田正志講師「古文書研究会」など、当時の教師陣や助手を指導者として、決まった曜日・時間に行われており、戦前までの諸講習会を受け継いだものであった。[25] 研究討論会は、「各時代を通じて、問題の所在を明かにし、時代の流れと共に、各問題の把握

を目的としたもの」であり、助手や学生の報告を通し、古代から近代までの社会経済史・文化史・思想史など様々な方面についてテーマを決めた討議を年十回程行っている。[26] 見学会は、戦前の国史学会が行っていた見学旅行の流れを汲むもので、指導者に大場磐雄や岩橋小弥太、村田正志ら当時の教師陣を据え、国立博物館、鎌倉円覚寺・瑞泉寺など、諸施設・寺社への見学を主とした。[27] それ以外にも公開講演会やその批評会、論文合評会も行われた[28]他、会報『史友』の発刊や、有志グループによって近世史の研究会、「小右記」といった記録の講読、久我家文書の解読・整理・編纂及び文献目録の製作なども行っていた。[29]

発足後の史学会の活動は前述のようなものであったが、発足から十年以上経った後の史学会はどのように変化していたのか。昭和三十五年七月の大学新聞には、七月十七～二十一日に東北へ史蹟見学旅行、同二十五日に近世史料採訪、八月下旬に中世史料の採訪を行い、八月二十八日～九月二日に夏期講座が予定されていることが記されている。[30] 加えて、昭和三十六年度前期定例総会の配布史料には、次のように記されている。

〈史料二〉昭和三十六年度前期定例総会[31]　※【】元活字／「」筆記訂正

昭和三十六年度前期定例総会　五月二十日（土）PM一～三時　於三一〇三教室

一、議長・副議長選出。（各一名）

二、三十六年度前期一般活動方針。

（総務・副総務）

・史学会をサークル活動の場として再認識してみよう。

・その為に研究会・集会等を通じて皆の話し合いの場を持とう。

・規約審議会の件

三、三十六年度委員会活動方針。

(1)編集委員会。

・年間五・六冊発行の予定。

・今年度第一回発行六月の予定。

・原稿の多数応募を望む。

(2)渉外委員会

・学□（判読不能）協との接渉に務める。

(3)企画委員会

・年間四回の史跡巡りを行う。

・夏期講座の件（八月二十八日～三十一日の予定）

・旅行の件

・新入生歓迎会の件

期日、五月二十一日（日）場所、向ヶ丘遊園

(4)庶務委員会

(5)会計委員会

(6)研究会委員会

(7)地誌委員会

四、前期活動方針に対する一般質問。

五、大学祭委員会の件。

構成メンバー

クラスより一名。学年別に三名。

計十二名。正・副委員長は互選。

大学祭への研究グループが決定してから委員を追加する。

六、学内の組織問題に関して。

現今の国大学内の自治組織の困乱の状態において、我々は、自治組織の一構成単位である史学会員としてこの問題を討議し、態度を表明しよう。

七、その他。

研究会□（判読不能）□

研究会名	時間	場所
日本書紀研究会	月曜日 PM十二・二〇～一・〇〇	学位審査室
続日本紀研究会	水曜日 PM六・〇〇～七・三〇	図書館三階ロビー
吾妻鏡研究会	金曜日 PM六・〇〇～八・〇〇	教室
信長公記研究会	（水）十二・〇〇～一・〇〇 （木）一・〇〇～二・三〇	第二史学研究室
神皇正統記	【土曜日】「木曜日」 【PM一時～】「昼」	教室

研究会名	時間	場所
近世史研究会	水曜日 PM四・一〇～六・〇〇	教室
近代史研究会	月曜日 PM四・一〇～	部室
古文書学研究会	（火）PM四・二〇～六・〇〇（木）PM六・〇〇～八・〇〇	教室
歴史理論研究会	金曜日 PM四・二〇～六・二〇	教室
外国史研究会		
二年概説研究会	木曜日 PM二・四〇～四・三〇	教室
一年概説研究会	金曜日 PM四・一〇～	教室

委任状

学部　　学科　　年　　組　　氏名

本史料からは、昭和三十六年度の史学会の活動内容がある程度推測できる。例えば機関誌を年間五・六回発行予定であり、活発な発表が行われていたことが窺える。また、年四回の史跡巡りを計画しており、変わらず見学会が続けられていたようだ。これ以外に旅行も行われており、戦前から続く学外での実施調査がこの時点でも引き継がれていたことがわかる。この他、新入生歓迎会も行われる予定であるが、学内で行われていた戦前と違い[32]、学外の向ヶ丘遊

園で行われている。一方、戦前には無かった夏期講座や、大学祭での報告も予定されており、戦後ある程度体制が整ってから新たに始められた活動も確認できる。特に、若木祭における研究報告はその後も続いており、後々史学会の活動の主軸の一つとなっている。

史学会内の研究会も変わらず行われていたことが確認できるが、「続日本紀研究会」「吾妻鏡研究会」「古文書学研究会」などは、昭和二十四年の「続日本紀輪読会」（毎週月曜・岩橋小弥太教授指導）、「吾妻鏡輪読会」（斎木一馬講師指導・毎週金曜）、「古文書研究会」（村田正志講師指導・毎週火曜）といった[33]、以前からの史料読みの活動が名を変えて行われていたことがわかる。

注目すべき点として、歴史理論研究会や概説研究会という年次ごとの研究会も行われている。具体的な活動内容は不明だが、研究会名から、恐らく歴史学研究の基礎となるようなものを学ぶ場であったのであろうと推測は付けられる。昭和三十六年当時の史学会では、戦前からの活動も引き継ぎつつ、戦後新たに始められた活動とともに、文献史学を主とした歴史学研究の基礎勉強と古文書解読の実践を行える環境が整っていたことが窺える。なお、外国史研究会の時間・場所が記されていないのは、史料の原文ママであるため、活動が行われていなかったのか、時間や場所がこの段階で決まっていなかったのかの詳細は不明である。

この他、昭和三十五年には史学会から地誌目録が刊行されている。昭和三十四年七月の大学新聞によると、これは、「全国地方誌分県目録」と題して各県ごとに分類され、県誌、市誌郡誌をはじめ地理、歴史、古文書郷土風物などの資料、約八千点の総合目録で、昭和三十一年から創立十周年事業の一環としてこの計画を進め、三年間にわたって各県の図書館など中心に集めていた[34]〈史料二〉中にある「地誌委員会」も、この関係で運営されていたものであろう。また、各地の史料調査も行われている。例えば昭和三十二年九月の大学新聞に、埼玉県入間郡高麗村（現日高市）の史料調

査を行っており、後々『近世百姓文集』として研究発表する意向が記されている。[35]

これらの研究会や旅行、史料調査が昭和四十年頃まで行われていたことは、機関誌『史友』より明らかである。昭和四十年発行の『史友』には、信長公記研究会の近況報告や、旅行委員会による南都旅行の報告が掲載されている。[36] しかし、『史友』はこれ以後の現存物の大半が確認できず、次に管見の限り確認できたものは、昭和五十三年の七二号であり、彙報欄は既に無くなっている。[37] また同号以降は、古代・中世・近代の史部会の各研究を掲載するようになっており、以前の研究会のような活動は確認できない他、当時の具体的な活動はわからなくなっている。なお、近世史部会については、確認できる昭和五十三年～五十七年の『史友』に記述が記されていないため、詳細不明である。

この点に関して、具体的な年は不明だが、昭和四十年代に史学会の活動形態が変化していることが指摘できる。実際、昭和四十九年の史学会勧誘冊子には、古代史部会・中世史部会・近世史部会・近代史部会・女性史部会・概説史部会が置かれ、運営を円滑に行うために、各史部会に代表・企画・編集・庶務・会計員が各一名ずつ置かれていること、部会ごとに特定史料の読解や論文学習などを進めていることの他、主な行事活動が、合同研究会・シンポジウム、合宿、大学祭に加え、機関誌『史友』及び『会報』の刊行であることが記されている。[38] 昭和三十六年の段階から運営形態に変化があったことは確かのようだ。但し、〈史料二〉にも近世史・近代史などの時代区分に即した部会があったことも確認できる他、昭和二十八年七月の『国史学』の研究会活動は、古代史部会、中世史部会、近世史部会、近代史部会、外国史部会、分校部会、連合研究会がカテゴリとしてあり、各部会の内に、例えば古代史部会には日本書紀（月曜日）、魏志倭人伝（水曜日）のように研究会が存在していたことは確認できる。[39] これらの時代区分が主体となるように再編成されたというのが、大きな変化だろう。

以上のように、昭和四十年頃までは、史学会設立以降行われてきた研究会や旅行が続いており、文献史学の基礎学

習と読解実践の場が細分化され、機能していた。その後、時代別部会ごとの活動に再編成・移行したと考えられる。

三　大学院生と史学専攻大学院会の出発

これまで取り上げてきた研究室研究会、史学会は、基本的に大学の学生に関わる教育・活動の場であった。しかし戦後、國學院大學は大学院を創設しているため、当然大学院生の活動も追わなくてはならない。そこで最後に、戦後の大学院生の活動を確認することを目的として、特に昭和四十年頃に史学専攻で組織された大学院会の設立について確認していく。

この大学院会設立に関しては、実は当時の国史学会とも深く関わりがあった。それがわかるのが、次の史料である。

〈史料三〉『国史学』七十年の回顧[40]

（前略）

三十九年以降も主として例会発表者は藤井（筆者注：藤井貞文）氏の人選によった。藤井氏は毎例会には必ず出席されて独特のポーズで発表を聴き、質疑のあと講評されるのが常であった。事務局は東京在住会員に例会通知を送ると共に、朝日、毎日、読売、東京、サンケイ各新聞社にも発送した。新聞の学芸欄に例会案内が載ると、国史学会の命脈を確めたものである。会員は例会での発表も、あるいは成稿があっても、「国史学」に載せることが出来ず、多くは「国学院雑誌」や他の学会誌に載せていた。

このころ、大学院生の中で比較的年齢を重ねていた小川信氏や坂根（筆者注：坂根義久）が幹事役となって大学院会を組織し、研究発表会、研修旅行、懇親会などを行った。その後、フリートキングの際には国史

学会の再建が必ず議題にのぼった。院生にとっては口頭発表、活字発表の組織された場が是非ともほしいところである。それには母校に根ざした国史学会の再建が捷径であり、将来の国史学会の担い手は院生であるなど熱っぽい意見が交わされ、大学院会の中で次第に再建案が煮つまって来た。

やがて四十一年になると、院生による本会再建の折衝は、黒川高明、鈴木靖民の両氏に引継がれた。また林陸朗氏を中心に、二木（筆者注：二木謙一）、鈴木（筆者注：鈴木義雄）、椿ひろみの三氏など助手による事務局の整備、院生への連絡などが行われ、評議員、事務局、院生有志などの根回しは四十一年五月迄に終わり、五月十八日、六月八日、再建のための準備懇談会が開かれた。この会合には事務局、院生、旧委員など十六名が出席し、再建の方法、活動の内容、財政問題など展望と問題点について話し合われた。

（後略）

大学院会は、昭和四十年頃に組織され、研究発表や研修旅行を既に行っていた。そして、当時の国史学会への要望として、口頭発表、活字発表の場を欲しており、院生らが国史学会へ働きかけていたことが確認できる。同時期の国史学会の例会報告は、岩橋小弥太、林陸朗、高柳光寿、鈴木敬三など助手や教授陣の他、坂根義久ら院生など若手研究者が報告するような状況にあった[41]。当時の国史学会について、『国史学』の発行は刊行費が少ないために行き詰まり、発行の目処が立たない低迷状態であった上、例会についても、「不定期で年に数回、参会者は少いときには四、五名を数えるに留まり寂莫としたものであった」とあり[42]、当時の院生にとって国史学会が自分たちの活動や研究報告の場として物足りない状況にあったことが、大学院会創設の大きな理由であったと言えよう。

国史学会はその後再建され、昭和四十二年十月に七五号（復刊一号）が発行されたが、少し遅れて、大学院会も機

関誌『史学研究集録』を創刊している。創刊号は昭和四十六年に謄写版（いわゆるガリ版）で刊行された[43]。巻頭には、総務（博士課程）樋口誠太郎氏の「創刊にあたって「心の鏡に」」が記され、当時の本学大学院文学研究科委員長の桑田忠親教授による「老春の練りごと」を始めとする、当時大学院に所属していた教授・講師・助手による寄稿、先述の樋口誠太郎氏「東山期における武将の故実観」などの院生の研究論文、現況報告や研究余録など院生による小稿の他、大学院会の規約や昭和四十五年度の活動報告が掲載されている。

活動報告には、当時の史学大学院会の活動状況が詳しく記されている。少々長いが、全文掲載しておく。

〈史料四〉昭和45年度史学大学院会活動報告[44]

前年度より修士課程に甲類・乙類の区別が設けられ、文献史学と考古学との専攻者との履修方法に大巾な差が生じてきたが、本年度に入り、考古学専攻者が研究会をもち独自な活動を開始した。こうして史学大学院会の性格について新たに考慮しなおす必要があるという認識が会員の間に高まり、本年度前期は考古学専攻者と文献史学専攻者との協調関係を模索しつつ経過した。後期に入り考古学専攻者との関係も含めて史学大学院会の性格と活動方針とを明確にするために規約の改正が要望されるに至り、十月十六日にその目的で総会が開催された。それ以後の活動情況は以下の通りである。

十月十六日

昭和四十五年度史学大学院会総会

議題1史学大学院会の性格と考古学記念会との関係について

2内規の改正

3今後の活動方針

承認事項

1史学大学院会の会員を甲類履修者とする

2委員会を設け新規約案を作製する

3見学会・講演会・研究会の実施（出席者二十五名）

十月二十八日

宮内庁書陵部見学交渉　書陵部編集課に今江広通氏を訪問　担当者樋口誠太郎

十月三十日

史学大学院会臨時総会

議題及決議承認事項

1史学大学院会規約の件

委員会の提示した原案を一部補正して満場一致により可決（この全文は後頁に載せる）

2役員選出

新規約により以下の通り役員を選出

総務＝樋口　庶務＝佐野・東四柳　会計＝蒲生・山口　渉外＝佐々木・杉村　編集＝伊林・田中（君）　会計監査＝宇田川・下村　研究会担当近代＝田中（正）　同近世＝蒲生　同中世＝石川　同古代＝真壁（出席者十三名委任状五通）

連絡及承認事項

1宮内庁書陵部見学の件
2笠原一男先生講演会の件

十一月一日
史学大学院会委員会
議題1笠原一男先生講演会準備の件
2定例親睦旅行の件（春に延期）
3研究集録発行の件
4文学研究科学生研究室管理の件

十一月四日
史学大学院会講演会
講師　東京大学教授　笠原一男氏
主題　真宗教団を通して見た中世仏教の成立の背景と特質（来聴多数）

十一月二十三日
宮内庁書陵部見学会
今江広通・是沢恭三両先生が、御多忙中にかかわらず史料の説明をして下さった。

十二月二十五日
史学大学院会懇親会
於、大衆割烹東信恵比寿

昭和四十六年

二月二日

史学大学院会委員会

議題1西角井先生告別式の件

2定例親睦旅行兼宿泊研修会の件

3研究集録作成の件

4文学研究科発表会の件

5その他

三月五日

史学大学院会委員会

議題1親睦兼研修旅行の件

2研究集録の件

三月二十六日～二十八日

史学大学院会親睦旅行会（兼研究会）

（行先）水戸―大洗―五浦（泊）―勿来―常陸太田―袋田（泊）―瓜連―水戸

水戸にては茨城県々史編纂室、大洗では願入寺、五浦では茨城大学美術研究所緒方先生にそれぞれ御世話になり、いろいろと便宜をはかっていただいた。

三月二十二日

修了年度生謝恩会
於、いくぜ
五月十一日
史学大学院会委員会
議題1研究集録の件
2新入生歓迎会兼総会開催の件
3新年度委員の件
五月二十五日
史学大学院会総会兼新入生歓迎会
於、氷川区民会館
議決承認事項　新年度委員の決定
昭和四十五年度の活動は以上である。
なお文末ながら本年度の活動に御協力頂いた学内学外の諸先生・先輩各位に謝意を表します。

会誌創刊が昭和四十五年より計画され、刊行作業が進められたことが記されているが、背景に前年度の修士課程の履修方法の変更と、考古学専攻で独自の研究会が開始されたことで、考古学専攻者と文献史学専攻者との協調関係を模索する必要が生じたことがわかる。結果として、史学大学院会の性格と活動方針とを明確にするために規約の改正が要望されるに至り、総会で会員や今後の活動に関する承認が、その後の臨時総会で規約改正と役員選出が承認されて

いる。創刊号の編集後記には、「昭和四五年度の総会は様々の意味で国学院大学大学院の発足以来のひとつの転換期であった様に思う。これ迄共同して活動していた、考古学専攻の仲間が研究活動の独自性を主張し別個に活動する様になり、これに伴ってこれ迄の規約が改正された。総会で、われ〳〵の手で「研究集録」を作ることが承認されて以来、原稿募集が始まったのは四五年十月からの事であった」[45]とあり、この総会で『史学研究集録』刊行も承認されたことが確認できる。ともあれ、昭和四十五年は当時の大学院会、ひいては大学院生にとって大きな転換期であり、その流れを受けて活発な活動の構想が持ち上がったことが記録からは窺える。

〈史料四〉からは、大学院会内で院生の発表会の他、外部の研究者による講演会、見学や研修旅行が行われていたことも指摘できる。講演会は十一月四日に行われ、東京大学の笠原一男教授による「真宗教団を通して見た中世仏教の成立の背景と特質」という題目であった。また宮内庁書陵部の見学会では、今江広通・是沢恭三両氏（ともに國學院大學卒）による解説も行われている。この見学会に先立ち、十月二十八日に総務の樋口誠太郎氏が宮内庁書陵部見学交渉のため、書陵部編集課の今江広通氏へ訪問している。更に、翌四十六年三月二十六日から二十八日には、親睦旅行会兼研究会として茨城県・福島県の各地を巡っており、水戸では茨城県史編纂室、大洗では願入寺、五浦では茨城大学美術研究所の緒方氏の世話で見学をしている。宮内庁書陵部への事前訪問などからも、当時の大学院会の活動は、大学院生の積極的な活動に応える形で、当時の大学の教師陣やＯＢ、他機関の研究者・教師の助力を得て充実した活動が展開できたと言うことができよう。このあたりは、戦前の国史学会や史学会を彷彿とさせる活動である。

『史学研究集録』はその後、昭和四十八年に第二号が刊行されたが、創刊号とは形態が変わり、大学院委員長桑田忠親による巻頭言の他、四点の論文に加え、会員すなわち各院生の研究テーマもしくはその進捗を記している。[46]第三号は少々時間が空き、昭和五十三年に刊行されたが、一点の論文と二点の研究レポート（研究ノート）の他、会員名簿

が掲載されるようになった[47]。以降、『史学研究集録』はこの三号の形態を引き継ぎ、論文もしくは研究ノートに会員名簿が掲載される形が基本となり、平成三年からは巻頭言が復活（一部に無い号も存在）、平成四年からは史部会ごとの活動状況も記されるようになっている。史料の性格から、大学院会の昭和四十年代の活動はこれ以上追うことは難しいが、当時の大学院生の活発な活動を裏付けるものであろう。

おわりに

戦後、本学で史学を専攻する学生達は、大学、大学院ともに盛んな活動を展開していたことが、本稿の分析からは確認できた。大学では、国史学会より学友会の一部会として独立した史学会が活動を活発化させており、戦後復活した研究室での指導研究会も、最終的に昭和二十年代には史学会と合流し、その活動は更に規模が大きくなっている。昭和二十～三十年代頃の史学会の主な活動は、十を超える時代ごとの特色ある研究会を中心に、見学旅行や機関誌刊行、研究発表の他、昭和三十年代には地誌目録の編纂・刊行作業も進められていた。授業外に、史料読解能力を向上し、専門知識を深め研究に資するための機会を多く設けているだけでは無く、史学会内に留まらない、研究を志す者にも向けた活動も行われていたことが明らかとなった。但し、これら研究会の活動は、昭和四十年代後半には解体・再構築され、活動形態が研究会単位から、時代・テーマ毎の部会単位へ移行されたようである。

一方大学院では、大学院生によって史学専攻の大学院会が昭和四十年頃に設立された。当時の国史学会が院生にとって活動や研究報告の場として物足りない状況にあったことが、大学院会創設の大きな理由であった。昭和四十六年以降は間を置きながらではあるが、機関誌『史学研究集録』も刊行が開始され、当時大学院で教鞭を執っていた教授陣の寄稿の他、院生の論文や研究ノートなどを掲載しており、史学専攻学生の研究発表の場として出発した。また

当時の大学院会では、大学院会内で院生の発表会の他、外部の研究者による講演会、見学や研修旅行が行われており、大学と同じく、授業外における史学勉強の機会を、院生の主導で設けていたことが確認できた。

これらの分析からは、戦後の本学において、大学・大学院を問わず史学を学ぶ学生達は、学術部会の一員として、或いは大学院生として活発に活動を展開し、授業外でも学びを深める機会を自らの手で設け、当時の教師陣・ＯＢ陣もそれに応えて学生の成長を促す活動の背を押していたことが窺える。その変革期は戦後と昭和四十年代頃にあり、どちらも本学の転換期であった。大学内の情勢の推移や、当時の学界の影響も受けつつ学生達も活動を活発化し所属組織の形態を変化させていたということであろう。

他方、本稿では、昭和四十年代までを分析の区切りとしたため、それ以降の学生の活動について詳細な分析をすることができていない。また、史学専攻学生の例に終始してしまったため、文学や経済・法学・神道など他専攻の学生の事例に言及することができなかった。これらの分析は、今後の課題としておきたい。

註

（1）拙稿「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」（『國學院大學　校史・学術資産研究』一三　令和三年）、同「國學院大學における学会活動と教育」（『國學院大學　校史・学術資産研究』一四　令和四年）

（2）前掲拙稿「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」。

（3）『國學院大學百年史　下』國學院大學　平成六年　一四九六―一四九八頁。

（4）前掲３『國學院大學百年史　下』一四九八頁。

（5）前掲３『國學院大學百年史　下』一五〇四頁。

（6）前掲３『國學院大學百年史　下』一五一一―一五一四頁、他。

(7) 前掲3『國學院大學百年史　下』一五一六頁。
(8) 前掲3『國學院大學百年史　下』一五一六頁。
(9) 前掲3『國學院大學百年史　下』一五一八頁。
(10) 『國學院大學新聞』三七　昭和六年六月　一三九頁。なお本稿の『國學院大學新聞』については、『國學院大學新聞　縮刷版　創刊号―第三〇〇号』（國學院大學新聞学会　昭和四十三年）を使用。
(11) 『國學院大學新聞』二五　昭和四年六月　九七頁。
(12) 『國學院大學新聞』四六　昭和七年十月　一七一頁。
(13) 『國學院大學新聞』五八　昭和九年八月　二一三頁。
(14) 『国史学』一九　昭和九年　七八頁。
(15) 『國學院大學新聞』六一　昭和十年二月　二二九頁。記事では、国史研究室において、毎週水曜二時半より四時半まで長倉助手指導の相互研究会、金曜日は四時半より六時まで長倉助手指導の「吾妻鑑」、木曜日は十時より十二時まで植木教授の指導で「山本大膳五人帳」を講読していることが記されている。
(16) 『国史学』一二　昭和七年九月　六四頁。
(17) 『国史学』二四　昭和十年　七五頁。
(18) 『國學院大學新聞』一六七　昭和二十三年十一月　五〇三頁。
(19) 例えば『国史学』五二（昭和二十五年四月、七一頁）に掲載された史学会の見学活動を確認すると、上野博物館法隆寺展（五月）、同正倉院展（十一月）、鎌倉円覚寺及び瑞泉寺（六月）、鎌倉浄光明寺古文書採訪（十月）、鎌倉円覚寺古文書採訪（十月）、根津美術館見学（十一月）、東大史料編纂所史料展見学（十一月）等があげられる。この内、鎌倉円覚寺古文書採訪、根津美術館、東大史料編纂所の見学会は岩橋の引率であり、岩橋が特に博物館や古文書採訪など、学生参加の見学会を盛んに行っていたことがわかる。
(20) 前掲19『国史学』五二　七一頁。
(21) 『国史学』六一（国史学会　昭和二十八年七月）掲載の研究会には、外国史部会として資治通鑑（土曜）、資本論（火曜）の研究会が行われていることが確認できる（同八〇―八一頁）。

(22) 前掲21『国史学』六一　八〇―八一頁、『國學院大學新聞』一八六　昭和二十八年十一月　五四一頁。新聞記事中の「古文書研究」は『国史学』に一致する研究会が無いが、戦前より国史学会では「久我家文書」を古文書講習で使用しているため、これに該当すると考えられる。

(23) 前掲拙稿1「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」一六〇―一六二頁。

(24) 前掲19『国史学』五二　国史学会　昭和二十五年　七〇頁。

(25) 前掲19『国史学』五二　七〇頁。

(26) 前掲19『国史学』五二　七一頁。

(27) 前掲19『国史学』五二　七一頁。

(28) 前掲19『国史学』五二　七一―七二頁。

(29) 前掲19『国史学』五二　七一―七二頁。

(30) 『國學院大學新聞』二四一　昭和三十五年七月　六九一頁。

(31) 「昭和三十六年度前期定例総会」（研究開発推進機構　校史資料「（昭和三十六年度学内発行・配布物一括、学生自治関係）」）。なお、本史料には元の持主による落書が多く、その部分は翻刻していない。

(32) 例えば、昭和七年の新入生歓迎会は第八教室で行われている（『国史学』一一　昭和七年　六二頁）。

(33) 前掲19『国史学』五二　七〇頁。

(34) 『國學院大學新聞』二三一　昭和三十四年七月十日　六六一頁。

(35) 『國學院大學新聞』二一二　昭和三十二年九月十日　六〇二頁。

(36) 『史友』五三　國學院大學史学会　昭和四十年。

(37) 『史友』七二　國學院大學史学会　昭和五十三年。

(38) 「ともに歴史を学ぼう」國學院大學史学会　昭和四十九年（研究開発推進機構　校史資料「（昭和四十九年度学内配布物一括、学生運動・サークル関係）」）。

(39) 前掲21『国史学』六一　八〇―八一頁。

(40) 「七十年の回顧」（『国史学』一一〇・一一一　国史学会　昭和五十五年）一四〇頁。

(41)　前掲40「七十年の回顧」一三九―一四〇頁。
(42)　前掲40「七十年の回顧」一三九頁。
(43)　『史学研究集録』創刊号　国学院大学大学院文学研究科史学大学院会昭和四十六年三月。発行月は表紙から採ったが、実際に刊行されたのは同冊子冒頭の「史学大学院会「研究集録」贈呈について」が九月十三日付であることから、それ以降と推測される。
(44)　前掲43『史学研究集録』創刊号。
(45)　前掲43『史学研究集録』創刊号。
(46)　『史学研究集録』二　国学院大学史学大学院会　昭和四十八年三月。
(47)　『史学研究集録』三　国学院大学史学大学院会　昭和五十三年三月。

本稿の執筆に当たって使用した研究開発推進機構の校史資料であるが、校史センターで行われている大学所蔵資料の整理作業に際し発見した資料である。未だ整理中の資料群であることはご了承いただきたい。